

《研究ノート》

## 日本の世界農業遺産研究の動向

四本 幸夫\*

### The Research Trend of Globally Important Agricultural Heritage Systems in Japan

Yukio YOTSUMOTO

#### 要旨

世界農業遺産は国連食糧農業機関（FAO）が食料と生計の保証、生物多様性、農法、文化、優れた景観が一体になった地域固有の農業システムを世界的に重要な動的遺産として認定する制度である。日本では11地域が認定されている。新しい認定制度の為、日本の世界農業遺産研究はまだまだ数が少ない。本研究では、CiNii Articles、J-Stage、Google Scholar の3つの主要な論文検索システムで収集した101件の無料で手に入る日本語論文を分析し、各研究における問題関心や課題はどのようなものか、そしてFAOが定める5つの認定基準のうちどの基準に言及した紹介・分析を行っているかの2点からその研究動向を明らかにしようと試みた。研究内容は、認定地域の行政へのインタビューのまとめ、世界農業遺産と日本農業遺産の説明、認定の効果、地域による遺産保護の取り組み、認定地域の農業遺産システムの特徴、世界農業遺産と教育プログラム、認定プロセスの実態であった。認定基準に関する記述では、食料の保証と伝統的知識システム及び適応技術に関しての議論が不足していた。

#### キーワード

世界農業遺産、研究動向、認定基準

### 1. はじめに

世界農業遺産は何世代にもわたって地域の社会環境や自然環境に適応しながら継承されてきた伝統的な農業と農法及びそれに関わって育まれてきた文化、景観、生物多様性などを相互に関連して一体と

\*立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部（College of Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University）  
yotsumot@apu.ac.jp

なった世界的に重要な農林水産業の動的システム<sup>1)</sup>として国連食糧農業機関（FAO）が認定する制度である。世界農業遺産は2002年に南アフリカで国連が主催した「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で提唱され、2008年に中国、フィリピン、チリ、ペルー、アルジェリア、チュニジアの6か国で最初の認定がなされた。農業の近代化により、緑の革命に代表される品種改良や機械化で多投入高収穫型農業が推し進められてきたが、環境破壊、貧富の差の拡大、地域住民の生活の質の低下などがもたらされた。これらへの反省から、自然環境との共生と豊かな農業生物多様性を保持している伝統的農業システムを優良事例として活用しようとして提唱されたものが世界農業遺産である（武内2016）。

世界農業遺産に認定されるためには5つの認定基準を満たさないといけない。認定基準の1つ目は食料及び生計の保証で、地域の人々の食料、栄養補給と生計がその農業システムにより保証されているかどうかを評価している。2つ目は生物多様性及び生態系機能で、農業の生物多様性と農業システムと関連する野生生物の多様性、そして農業と環境が調和しているかどうかを評価している。3つ目は伝統的知識システム及び適応技術で、農業システムを維持してきた地域固有の伝統的な知識やその土地の環境に適応する技術などのことである。具体的には育種や灌漑技術などが評価する例として挙げられる。4つ目は文化、価値観及び社会組織で、これは農業を生業として生きていく中で育まれてきた農文化のことで、具体的には農業に関連する伝統的な祭り（収穫祭など）や慣習、それらを運営、維持していく組織があるかどうかを評価している。5つ目は優れた景観及び土地と水資源管理の特徴で、社会的、環境的な制約を解決しようとして作られたモザイク状になった森林や棚田の景観など優れた景観があるかどうか、また、ため池や水路などを用いた水の管理が適正に行われているかどうかを評価している。

現在（2020年3月）、21か国で52のサイトが認定されている。日本においては11のサイトがある。これらは、トキと共生する佐渡の里山（2011）（新潟県）、能登の里山里海（2011）（石川県）、静岡の茶草場農法（2013）（静岡県）、阿蘇の草原の維持と持続的農業（2013）（熊本県）、クスギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環（2013）（大分県）、清流長良川の鮎：里川における人と鮎のつながり（2015）（岐阜県）、みなべ・田辺の梅システム（2015）（和歌山県）、高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム（2015）（宮崎県）、持続可能な水田農業を支える「大崎耕土」の伝統的水管理システム（2017）（宮城県）、静岡水わさびの伝統栽培：発祥の地が伝える人とわさびの歴史（2018）（静岡県）、にし阿波の傾斜地農耕システム（2018）（徳島県）である。

よく比較されたり、混同されたりする国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の世界遺産（文化遺産と自然遺産の2種類がある）は、1972年の第17回ユネスコ総会で世界遺産条約が採択されて始まった。1978年にドイツのアーヘンの大聖堂、エチオピアのラリベラの岩の聖堂群、アメリカのイエローストーン国立公園など12件が世界遺産に登録された。2020年3月の時点で、167か国、1,121の遺産が登録されている。日本においては、1993年に法隆寺地域の仏教建造物群、姫路城、屋久島、白神山地の4つの遺産が認定され、現在、23の遺産が登録されている。このように世界農業遺産は世界遺産と比較して、認定制度の設立と認定年が新しく、規模が小さいのが特徴である。したがって、世界農業遺産の研究は世界遺産の研究と比べるとまだまだ数が少ない<sup>2)</sup>。しかし、認定地の増加に伴いこれから増えていくだろうと予想される。日本は全世界のサイトの21%を持っており、これは世界第2位のサイト数

1) 世界農業遺産には地域内に住む人々の生業も含まれていることから、世界文化遺産のような不動産ではなく、変化してゆく動的遺産という特徴を持つ。

2) 以下が論文検索システムでの文献ヒット数の違いである。J-Stageでは「世界遺産」3,310件、「世界農業遺産」135件、CiNiiでは「世界遺産」5,133件、「世界農業遺産」155件、Google Scholarでは「世界遺産」53,300件、「世界農業遺産」343件である。

でもある。最初の世界農業遺産の認定から9年が経ち、新たに認定を得ようとする地域もいくつかある。世界農業遺産に対する認知や関心、特に認定地域の住民や農村振興を目指す地方自治体の関心が以前よりも増していると予想されることと、これまでFAOの認定する日本の世界農業遺産に関する研究の動向についてまとめた論文は皆無であるということから、その実態について知ることは意義があるといえる。

本稿では、日本の世界農業遺産研究の現状について明らかにしたい。具体的には、2つの観点からその実態を見ていきたい。1つ目は、どのような研究がなされているのかを明らかにするために、世界農業遺産自体が研究目的かそうではないか、研究対象となった認定地域はどこか、及び研究テーマについて整理していく。2つ目は、先に挙げた世界農業遺産の特徴を表す5つの認定基準でどれに関する記述が多いのか、またそれらの記述はどのようなものかを明らかにすることである。

## 2. 研究方法

本章では、研究論文の収集方法とそれらを整理する方法について論じていく。まず、本研究の分析では書籍を除く。書籍としての世界農業遺産研究は数が限られていて<sup>3)</sup>、直接、世界農業遺産を扱ったものは5冊しかない<sup>4)</sup>ので脚注に簡単に紹介する。

書籍を除く、無料で手に入る日本語の研究論文を対象とする<sup>5)</sup>が、それらの論文を集める方法として、

- 3) 寺村(2016)は、世界農業遺産に関する書籍は2016年3月の時点で2点しか出版されていないと述べている。それらは、武内(2013)と世界農業遺産BOOK編集制作委員会(2015)である。
- 4) 除外する書籍の内容は次のとおりである。1冊目の武内(2013)は、世界農業遺産とは何かについて述べた後、日本の5つの認定地(佐渡地域、能登地域、阿蘇地域、掛川周辺地域、国東半島・宇佐地域)について概説している。最後に、日本で研究が進められてきた里地里山概念と世界農業遺産の考えとの共通性を論じている。2冊目の世界農業遺産BOOK編集制作委員会(2015)では、世界農業遺産について、その理念と認定基準、認定されるまでのプロセスを簡単に紹介したあと、先に挙げた5つの認定地と2015年出版当時は候補地であった、みなべ・田辺地域、長良川上中流域、高千穂郷・椎葉山地域について紹介している。3冊目の藤井(2015)は、能登の世界農業遺産としての価値を能登の各地域の風土、食、生業、祭りなどを通して紹介している。4冊目は、単行本の中の1章、野村・梶原(2017)で、イギリスで盛んなフットパスを応用することで、世界農業遺産で認定要素の一つとなっている阿蘇の農文化への理解を深めるとともに地域振興を進めていく可能性について考察している。5冊目も単行本の中の1章、香坂他(2016)で、この中では、世界農業遺産の認定が農産品の価値向上につながるかどうかについて、生活協同組合コープいしかわが扱う能登地域の農産物の取り扱い品目数と価格を調査して明らかにしている。結論として、農産品の取り扱い品目数も価格も認定による効果はないという結果がでた。
- 5) 本研究では無料で手に入る日本語文献のみとし、英語文献は使用していない。理由としては、日本の世界農業遺産には学术界だけでなく、行政や地域住民の積極的な関与があり、日本、中国、韓国の世界農業遺産関係者が集う東アジア農村遺産学会の年次大会も日本側は研究者よりも行政(国、地方自治体)や地域のステークホルダー(農家など)の参加が多い。したがって、読者の多くは文献を日本語で読み、研究者ではないので、有料論文をそれほど購入しないと想定されることである。日本語に限定したもう一つの理由は英語論文の絞り込みがうまくできないからである。世界農業遺産の英語訳(Globally important agricultural heritage systems)で検索(2020年6月4日検索)すると、CiNii Articlesでは0件、J-Stageでも0件だった。Google Scholarは論文を絞り込む機能があまりよくないため、164,000件ヒットした。Japanを追加しても60,600件、更にPDFを追加すると、逆に192,000件と増えた。Japanを追加した60,600件のリストの最初の50件のタイトルにある研究対象地名を見ると、日本12件、中国5件、韓国3件、インド1件、ヨーロッパ1件となり、検索ワードにJapanと入れたにもかかわらず、それ以外の地域が10件もヒットした。ちなみに、英語の文献で世界農業遺産を取り扱うジャーナルでよく知られているのは中国科学院地理科学・資源研究所が編集する*Journal of Resources and Ecology*である。また、最近では*Sustainability*というジャーナルにいくつかの論文が掲載されている。

3つの主要な論文検索システム CiNii Articles、J-Stage、Google Scholar<sup>6)</sup>を使う。

Google Scholar は2020年2月12日、J-Stage は2月13日、CiNii Articles は2月17日に「世界農業遺産」のワードで検索をおこなった。これらの日付までのそれぞれのシステム内にあるすべての文献が検索対象となっている。Google Scholar からは343件、CiNii Articles からは155件、J-Stage からは135件の結果を得た。J-Stage に登録されている論文はPDFで見ることができる。CiNii Articles は“すべて”と“本文あり”で検索でき、“本文あり”はPDF形式で論文を見ることができる。CiNii Articles の“本文あり”で52件の結果を得た。Google Scholar は、“本文あり”の検索機能がないので、「世界農業遺産 PDF」で再検索すると75件になった。したがって、J-Stage、CiNii Articles、Google Scholar の3つを合わせると262件のPDF形式の文献<sup>7)</sup>が見つかった。これらの文献のタイトルと著者名を見て、重複しているものを省くと176件の文献になった。ここから、要約のみで本文を取り寄せるのに費用のかかるもの4件を除いた<sup>8)</sup>。さらに、研究論文ではない文献を対象から外した。研究論文とは何かについてだが、ここでは、研究論文とは、研究目的、研究方法、研究の結論のあるものとする。したがって、それらの含まれていないもの、具体的にはイベントのニュース(9件)、ジャーナルの表紙や巻頭言(4件)、書籍紹介(2件)、研究室紹介(3件)、シンポジウムの案内や内容紹介の記事(9件)を研究論文ではないものとして除外した。また、大会で発表した抄録のみ(1/3～1ページ)のもの26件も論文にはなっていないので対象から外した。最終的に、119件のPDF形式の論文を収集することができた<sup>9)</sup>。この119件を本研究の分析対象とした。これら119の分析対象の論文に目を通すと、“世界農業遺産”のワードが論文の文献リストのみに出てきたり、そのワード自体がない論文、論文の下に他の関連論文の要旨がありその中のキーワードとして出てくるもの、脚注の中に出てくるもの、研究論文ではなく町の紹介や講演者が地元の紹介をする中で出てきたりするものが18件あり、これらを除外することとした。従って、本研究の2つの目的の為の分析は最終的に101件の論文に対しておこなった。

分析方法は、101件の論文のそれぞれの要旨、はじめに、結論、その他の部分を読み、論文の研究目的を把握した。また、PDFの文字検索機能を用い、すべての世界農業遺産のワードの箇所を見つけ、そのワードの文の前後を読み、研究目的と照らし合わせて世界農業遺産に関する研究か、単に世界農業遺産に言及していて、世界農業遺産の研究とは言えないものなのかどうかを判断した。そして、世界農業遺産の研究であると判断した論文の内容を整理した。また、世界農業遺産の認定基準についてどのような記述がなされているかについては、質的研究ソフト NVivo のノード機能とコーディング機能を使ってテキストを整理した。

分析対象とした101の文献のうち、論文の中に世界農業遺産というワードが1～3個だけ現れる論文は、他の研究目的を達成するために世界農業遺産を事例などとして挙げている可能性が高いので、そ

6) CiNii Articles は国立情報学研究所が運営する学術論文のデータベースで、2,063万件(2020年2月時点)を超える日本の論文を検索することができる。J-Stage は国立研究開発法人科学技術振興機構が運営している科学技術情報プラットフォームで、2020年2月の時点で4,987,297論文を扱っている。Google Scholar はグーグルが運営している学術情報の検索エンジンで、J-Stage よりも多くの文献を収集することができ(山本2017)、Orduna-Malea et al. (2015)の研究によると2014年5月の時点で1億6,000～1億6,500万の文献があると言う。以上の3つの学術情報の検索サイトを使うことにより、現時点での日本の研究論文を最も包括的に収集することができると思う。

7) PDFになっていないものは371件にのぼる。それらを取り寄せるとなると、図書館を通してコピーしたものを送ってもらい、発行しているジャーナルやデータベースの会員になるなど、いずれにしてもすべてを取り寄せるとなると多くの時間と特に費用がかかる。したがって、本研究ではPDFになっていない文献は扱わなかった。

8) 上記註7と同じ理由で、本文のあるPDFを取り寄せようとする費用がかかる。

9) 参考として本ノートの末尾に「資料」として検索・収集した文献リストを掲げた。

これらの論文をピックアップし、それぞれの論文で、世界農業遺産というワードがどのようなコンテキストで言及されているかをチェックした。さらに、論文の研究目的も確認すると、世界農業遺産の研究とは言えない論文が71件あった。例えば、尾家・李（2018）では「その後、昭和の町豊後高田の観光客が増加する中、そば道場の開設（2013）、世界農業遺産の認定（2013）など観光振興にも拍車がかかっている」（尾家・李 2018: 80）という1文にのみ世界農業遺産のワードが出てくる。この論文は、日本での食によるまちづくりの変遷、食の街道によるフードツーリズム開発の特性、また欧米との比較によるフードトレイルのマネジメント理論の明確化を研究目的としている。世界農業遺産は食によるまちづくりの例として挙げられた大分県豊後高田市の説明の中での言及である。もう一つ例を挙げよう。藤田（2016）には1か所だけ世界農業遺産のワードが出てくる。それは、「近年では世界農業遺産に認定されるなど、自然と人の営みにより形成されたランドスケープに益々注目が集まっている」（藤田 2016: 45）という文においてである。この論文の研究目的は、ランドスケープエコロジーの知見がまちづくりの現場で役立つために、風土に根ざした自然環境と文化や人々との関係の保全と保存、および現代における創造的な取り組みについて事例を用いながら考察していくことである。ここでは、熊本県阿蘇山一帯のランドスケープを事例として挙げているが、その中での言及である。このように、研究目的と直接関係がなく、単に事例の説明に世界農業遺産のワードが入っているものは、本研究では世界農業遺産の研究とは見做さないこととした。従って、日本の世界農業遺産の研究は30件となった。

### 3. 結果

#### 3.1 日本の世界農業遺産研究

日本の世界農業遺産の研究30文献の内、世界農業遺産自体が研究目的となっているものを一次的な研究とした。具体的には、世界農業遺産の制度に関する研究や認定地の世界農業遺産システムの研究である。それ以外を二次的な研究とした。二次的な研究とは、研究目的が世界農業遺産自体ではなく、他に研究目的があり、その研究目的を達成するために比較対象や事例として世界農業遺産が取り上げられているものである<sup>10)</sup>。

まず、二次的な研究対象となっている14件の研究テーマを見ると、地域活性化に関する論文が4件、環境保全に関する論文が3件、ジオパークやエコパーク研究の論文が3件、教育プログラム開発が3件、農法に関する論文が1件であった。地域活性化の論文では、農泊による地域活性化の議論の一例として世界農業遺産地域の農泊が取り上げられたり（北川 2017）、図書館における地域資源としての世界農業遺産に関する工夫をこらした情報発信についての報告であったり（島津 2015）、地域づくりで重要な要素となる地域らしさの議論のなかで世界農業遺産に言及していたり（嘉瀬井 2017）、地域のステークホルダーの関心事として世界農業遺産が挙げられたり（岩見・馬場 2017）している。環境保全の3つの論文（池邊 2014；中里・諸岡 2014；大元・中川 2017）では、分析レベルは違うが、共に世界農業遺産の制度を環境保護計画と関連させて地域の環境と景観を保護していくというものである。ジオパークやエコパーク研究の論文（梶原 2014；酒井 2016；楊 2017）では、それぞれの認定制度の特徴を明らか

10) 一次的か二次的かを絞り込む方法は以下の通りである。まず、30件の論文のタイトルに世界農業遺産という言葉や認定地の世界農業遺産システムの名称が入っているかどうかを確認した。これにより、一次的な研究が16件、二次的な研究が14件となった。タイトルが研究目的をあらわしていない可能性が残るので、30論文をすべて読み、研究目的が世界農業遺産自体かそうでないかを確認した。結果としては、タイトルで判断したのと同じ結果となった。

にするために世界農業遺産が比較対象として扱われている。教育プログラム開発の論文は、世界農業遺産の内容をプログラムに入れて特徴ある教育を目指していくもの（服部他 2017；町田他 2019）や景観と食を結び付けた地域独自の教育プログラムで、世界農業遺産の1サイトが取り上げられたりしているもの（中山・真田 2018）である。農法に関する論文は、世界農業遺産地域で行われている農法が有効かどうかを検証する論文（稲垣他 2019）である。これら 14 の論文で、具体的な認定地域が取り上げられているのは 10 件で、それらは、徳島（2 件）、能登（3 件）、佐渡、岐阜、静岡、阿蘇、大分であった。

次に、世界農業遺産自体を主要な研究対象とした 16 件について見ていく。まず、2 つの文献は報告書（牛尾 2016, 2017）で、世界農業遺産地域を現地調査した時の自治体職員と環境省職員へのヒアリングをまとめたものである。インタビューデータをそのまままとめたもので、分析や論考はない。次の 2 つの論文は、世界農業遺産の概要とそれを参考にして創設された日本農業遺産について説明している（武内 2016；濱本 2016）。他の 2 つの論文は、認定の効果に関して議論している（黒川他 2019；香坂・内山 2016）。具体的には世界農業遺産の認定が農産物の価値を高めるかどうかについての研究である。この 2 つの論文は結果が異なるが、それは研究対象とした認定地域の地理的、社会的コンテキストが違う所からきている。他の 2 つの論文は、遺産を保護していくための地域の取り組みについて論じている。1 つは農村文化を保持するためにどのように後継者を育てていくかについて（井上 2017）、もう 1 つは農村景観を保全するためのボランティアによる活動について論じている（大津 2016）。さらに 2 つの論文では、それぞれの認定地域の農業遺産システムの特徴が説明されている（稲垣・楠本 2016；林 2016）。また、5 つの論文は教育に関する論文で、そのうち 3 つは小学生向けの ESD（持続可能な開発のための教育）の教材開発に世界農業遺産地域の事例を活用しようとするものである（祐岡他 2016；山方他 2018, 2019）。他の 1 つは、世界農業遺産地域を題材として、現地での農業体験を含む大学のアクティブラーニング型授業の開発と効果を検証するもの（寺村 2016）である。もう 1 つは、小学校と中学校における栽培体験活動を通じて世界農業遺産を継承する可能性についての研究（荒木他 2015）である。最後の 1 つの論文では、認定に至るまでのプロセスについて説明している（原・三瓶 2016）。これら 16 の論文でケースとして取り上げられている認定地域は、能登（3 件）、静岡（2 件）、阿蘇（2 件）、大分（2 件）、和歌山（2 件）、佐渡、岐阜、宮崎、徳島であった。

### 3.2 5つの認定基準に関する論述

先にも述べたが、世界農業遺産とは世界的に重要な農法、生物多様性、文化、景観を持つ地域固有の農業システムで、そのシステムを支える地域の人々に食料と生計を保証する動的遺産のことである。FAO は、5 つの認定基準（1. 食料及び生計の保証、2. 生物多様性及び生態系機能、3. 伝統的知識システム及び適応技術、4. 文化、価値観及び社会組織、5. 優れた景観及び土地と水資源管理の特徴）を設けているが、これらは、世界農業遺産システムが提供する機能、品物、サービスの全体を表し、システムの要素間の複雑な関係を反映しているということで、これらすべての基準が満たされないと世界農業遺産には認定されない。従って、世界農業遺産を理解するにはこれら 5 つの認定基準を見ていくことが重要である。以下、世界農業遺産を構成するこれら 5 つの評価基準に関して、世界農業遺産研究（それを主要テーマとしている 16 文献）ではどのように論述されているのかを見ていきたい。

食料及び生計の保証の基準に関する論述では、世界農業遺産の認定が日本の食料生産を多面的に考察する契機になる（山方他 2018）ことが述べられている。日本の教育現場では、食料自給率をどのようにして向上させるのか、後継者不足を解消するにはどうしたらよいか、地産地消をどのように推進していくのかを議論するが、農家の立場に立って農家が豊かになることを考える機会があまりない。小規

模農家が生業として農業に従事していく視点が認定によって見えてくる。生業として農業を成り立たせるためには、棚田の維持に資金を出したり、農作業を行ってくれるボランティアを募ったりという農業従事者へのサポートだけでは不十分である（祐岡他 2016）。農産物に付加価値を付けるブランド化、観光や加工品製造など他のビジネスと兼業で農業従事者の生計を充実させていくことが必要となってくる。世界農業遺産の認定によりその可能性がでてくる。認定地域の自治体もそれを視野に入れて認定を目指してきた。この基準に関する論述では、日本は先進国で、農業は市場経済下にあるので、生計の保証に関する論述はあるが、発展途上国の農村地域の生業経済下のような食料と栄養補給の記述はあまりない<sup>11)</sup>。

生物多様性及び生態系機能の基準に関する論述では、生物文化多様性という概念について述べられている（武内 2016）。これは生物多様性と文化多様性を結び付けた概念で、地域にある自然の生物多様性が人々の福利に寄与する一方で、人間が営む伝統的な農業が二次的自然の生物多様性を生み出している。つまり、世界農業遺産で認定されている農業システムは農業生物多様性をもたらしているとする。そして、農業生物多様性への貢献は、そこで作られる農産物に付加価値として加えることができる。その取り組みとしては、生物多様性を大きな特徴としている静岡と佐渡の農業システムが良い例である。「トキと共生する佐渡の里山」というタイトルの農業システムの佐渡では、お米が売れない産地は国によって生産調整が進められ、耕作放棄地が増えて生物多様性のある田んぼが減少していった。売れる米を作ることと、トキが住める生物多様性のある田んぼを確保するという目的のもと、佐渡の認証米制度が作られた。しかし、この制度も時間がたてば、市からの補助金を目当てとする農家が出てきたりしてこの制度の本質である生物多様性を理解しない農家も増えていく。したがって、認定基準を引き上げて除草剤の禁止や認定のランクに無農薬のカテゴリーを加えるなど、生物多様性をもう一度中心にしていく取り組みがおこなわれている。そして、地域で生物多様性を理解するために生物多様性子ども会議や田んぼアートなどの企画が練られている（牛尾 2017）。茶草場農法をおこなっている静岡では、茶草場と呼ばれる草地からススキやササなどを刈り取って、秋から冬にかけて茶畑に敷いていく農法をおこなっている。これにより茶草場という半自然草地が維持されて、オミナエシ、カケガワフ、キバツタなどの希少な植物や昆虫が生息できる生物多様性に富んだ環境を作り上げている（稲垣・楠本 2016）。世界農業遺産「静岡の茶草場農法」推進協議会は茶草場農法実践者の認証制度を制定している。農業者の茶園の何パーセントが茶草場農法を実践しているかで3段階の認証に分かれている。これは、お茶の品質の認証ではなく、生物多様性に貢献することの認証である。茶草場農法の取り組みと消費者評価の関係では、その取り組みがあり世界農業遺産の表示がされていると、消費者はそのお茶に対しての評価を上げる。しかし、地域差があり、世界農業遺産の認定地域から遠いほど、その取り組みに対する評価は低下していく（黒川他 2019）。

伝統的知識システム及び適応技術の基準に関する論述は多くがこの認定基準の説明であり、日本の具体的な農業システムに関しては、阿蘇の草資源の循環的利用とその管理システムにより持続的農業が営まれていることの言及（祐岡他 2016）ぐらいである。

文化、価値観及び社会組織の基準に関する論述では、伝統文化継承の取り組みや伝統文化の効果に関する論述となっている。佐渡の鬼太鼓は秋の豊作を願う農文化で、人々が神社や集会所に集まって練習

11) 世界農業遺産は元々、FAO が地球環境ファシリティ（GEF）の資金を使い、土地・水資源部の1つのプロジェクトとして発展途上国を対象として始まった（武内 2016）。これは、農業が近代化されグローバル化される中においても、主に発展途上国では多くの伝統的な農業システムが基本的な生計と食料の安全を何十億もの農民に提供しているの（Koohafkan and Altieri 2017）、そのシステムを保護するのが目的である。

をする。これは、地域の団結力を高める効果がある。高度経済成長時には鬼太鼓をやめる地域もあったが、最近はその復活させる集落も増えてきた（牛尾 2017）。能登には豊作や豊漁、疫病退散を願う「キリコ祭り」とユネスコの世界無形文化遺産に登録されている農耕儀礼の「あえのこと」という2つの伝統行事がある。これらには地域を離れた人々に帰郷を促す効果がある（祐岡他 2016）。高千穂郷・椎葉山地域は神事芸能である神楽が盛んな地域である。人口減少と高齢化が進む中山間地域でこのような伝統文化を継承するには担い手の確保が必要である。その為に、低年齢層の子供たち、帰省者やUターンの人たちの参加を進めていて、神楽の奉納を継続させていくにはこれらの人々が不可欠の存在になっている。幼少期からの参加は、神楽の継承に対する責任や誇りを生み出し、地域とのつながりを深め、他出しても伝統文化を守っていく担い手として地域で受け入れられるようになる（井上 2017）。

優れた景観及び土地と水資源管理の特徴の基準に関する論述では、世界農業遺産申請時に、景観を地域の農業システムの中に位置づけて、その機能とプロセスを整理するにはランドスケープや農村計画学の知識が必要になると議論されている。それにより、田辺梅林が単なる梅林の景観ではなく梅システム（梅林とそれに隣接する薪炭林としての雑木林。雑木林は梅の受粉に不可欠なミツバチの住処となり、また、水や養分を蓄えて斜面の崩壊を防ぐ）を象徴する景観となる（原・三瓶 2016）。同じように、国東半島では、雨がすぐに海に流れる地形のため、安定的な農業用水を得ることが求められてきた。ため池の建設はクスギ林で涵養された水をためてそれを稲作に使うことを可能にし、そのため池がある景観がこの農業システムの水資源管理を象徴している（林 2016）。阿蘇の景観は人工的に維持されてきた雄大な草原である。この景観は畜産、稲作、畑作の複合経営により形成されてきた。草原を活かした畜産と、家畜の排せつ物を堆肥として米と野菜の栽培に使うことでこの農業システムは循環ができています。この景観を維持するために、阿蘇グリーンストックという団体が野焼きボランティアの取り組みをおこなっている。しかし、この農業システムを維持するためには野焼きだけでは不十分で、農産物の価格だけでなく景観や生態系に経済的な価値を認める農家を増やす必要がある（大津 2016）。能登の世界農業遺産は里山里海がテーマで、そのシンボリックな景観として白米千枚田がある。日本海に面した棚田で、1956年に輪島市文化財指定名勝に認定されていて、古くからの景勝地として知られている。この景観は「千枚田愛耕会」という保存会により維持されている（祐岡他 2016）。阿蘇の農家と同様に、棚田の景観は当たり前のことであるので、その価値を十分に理解していない可能性がある。

以上、世界農業遺産の認定基準に関する論述をまとめたが、これらの論述から考察したことを2点述べたい。1点目は評価基準の組み合わせによる生計の保証の可能性、2点目は評価基準3の伝統的知識システムと適応技術の研究がなぜ少ないのかということである。

まず、日本の農業では、農家の経営規模が小さいと生計を成り立たせるのは難しい。しかし、世界農業遺産の認定により小規模農家が儲かるような仕組みを考えていくようになるし、自治体において世界農業遺産班などの部署もでき、協議会が設立され、予算もつくようになる。したがって、世界農業遺産の認定は小規模農家の生計を考えていく良い契機となる。生計の保証はその他の認定基準と組み合わせることで様々なアイデアが出てくる。基準2の生物多様性及び生態系機能と農作物をつなげて高付加価値を目指していこうという取り組みが考えられる。佐渡の「朱鷺と暮らす郷」認証米、静岡の茶草場農法での認証茶の例がある。また、基準3の適応技術、基準4の文化・価値、基準5の優れた景観と観光を組み合わせた取り組みも考えられる。石川県能登町では、「春蘭の里」という地域ぐるみでの農家民宿が行われている。ここでは、水田に伝統的な家屋が広がる景観を見て、炭焼きや収穫体験をして、地域の食文化に触れるという、3つの認定基準の組み合わせが観光客を引き寄せる要素となっていて、農家の生計の助けになっている。



次に、伝統的知識システム及び適応技術の認定基準に関する論述だが、この基準とは何かという説明が多く、具体的な認定地の伝統的知識システム及び適応技術に関する論述はあまりされていなかった。これは、近代化された現代の日本の農業において、地域固有の伝統的な知識と農業技術を使いながら生計を保証する農業システムが実際にあるのかどうかという問題と関係している。発展途上国の自給農業の村々では、伝統的な知識と農業技術が現存の農業システムを維持し、生計を支えており、それらの上に重なりがある。一方で、日本の場合はこれらの間の重なりが希薄なのではないだろうか。しかし、日本の地域が世界農業遺産認定を求めて申請書を出すときには、この基準は必須なので、地域固有の伝統的な知識や農業技術が今も現存する農業システムに貢献しているという何らかのストーリーを組み立てなければいけない。したがって、伝統的な知識や農業技術は認定の為に必要なシンボリックなもので、実際には認定された地域の農業の全体は近代的なシステムであり、その中でわずかな経済的貢献しかしていないという現実があるのではないだろうか。例えば、大分県国東半島のシチトウイや石川県能登半島の菊炭などはそれぞれの世界農業遺産の認定で取り上げられているが、現実として存続がやっとの状態である。世界農業遺産の動的遺産システムのアイデアは画期的であるが、伝統的農業から近代農業に移行してしまった地域では、認定基準3は非常にシンボリックなものに留まっているのが現状であると考えられる。したがって、過去の伝統的な知識や農法についての研究はあるが、現在の日本の近代的農業システムの中での伝統的な知識や農法（つまり日本の世界農業遺産研究）には難しさがあるのではないだろうか。だから、それぞれの認定地域のシンボリックな伝統的な知識や農法についての叙述は認定地の紹介記事で多く見かけるが、認定基準3自体の研究が少ないのだと考えられる。

## 4. おわりに

本研究では、日本における世界農業遺産の研究の現状について明らかにしようとした。3つの主要な論文検索システムで無料で手に入る日本語の世界農業遺産研究論文を探すと176件の文献が見つかった。それらを精査して、最終的には101件の論文を分析の対象とした。この中で、世界農業遺産研究と言えるものは30件であった。そのうち、世界農業遺産がメインのテーマとして研究がなされているのは16件だった。この16件の研究テーマは、世界農業遺産地域の行政へのインタビューのまとめ2件、世界農業遺産と日本農業遺産の説明2件、認定の効果に関するもの2件、地域による遺産保護の取り組みについて2件、認定地域の農業遺産システムの特徴について2件、世界農業遺産と教育プログラムに関して5件、認定プロセスの実態に関するもの1件であった。また、ケースとして取り上げられている認定地域は、能登（3件）、静岡（2件）、阿蘇（2件）、大分（2件）、和歌山（2件）、佐渡、岐阜、宮崎、徳島であった。認定基準に関する記述では、食料の保証と伝統的知識システム及び適応技術に関する議論が不足していた。それらの議論の不足は、FAOの世界農業遺産認定制度がもともと発展途上国の伝統的な農業から生計をたてている地域を視野に入れたものであるため、先進国の日本ではそれらの評価基準をそのまま当てはめるのが難しいことによると考えられる。

## 謝辞

編集委員の先生及び査読の先生には論文の向上の為に多くの貴重なアドバイスを頂きました。感謝いたします。なお、本研究はJSPS 科研費（17H02255）の助成を受けました。

## 引用文献

- 荒木祐二・岡村浩美・塚脇真二（2015）「奥能登地域の学校教育における栽培体験活動の現況：世界農業遺産の継承に向けて」『日本海域研究』46: 49-55.
- 藤井満（2015）『能登の里人ものがたり—世界農業遺産の里山里海から』アットワークス。
- 藤田直子（2016）「まちづくりの現場で、ランドスケープエコロジーはどのような貢献が期待されているか？」『景观生態学』21(1): 43-47.
- 濱本和孝（2016）「世界農業遺産と日本農業遺産」『農村計画学会誌』35(3): 357-360.
- 原祐二・三瓶由紀（2016）「みなべ・田辺の梅システム—そのランドスケープの特徴と選定プロセスの実際—」『農村計画学会誌』35(3): 379-382.
- 服部浩司・岳野公人・湯地敏史（2017）「海洋環境保全意識に関する技術科における塩づくり授業実践」『環境教育』27(1): 40-44.
- 林浩昭（2016）「世界農業遺産「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」の潜在的価値」『農村計画学会誌』35(3): 375-378.
- 池邊このみ（2014）「個別計画から総合計画へ」『国立文化財機構奈良文化財研究所 平成25年度遺跡整備・景观合同研究集会報告書』8-11.
- 稲垣栄洋・楠本良延（2016）「静岡の茶草場農法」『農村計画学会誌』35(3): 365-368.
- 稲垣栄洋・長谷川佳菜・窪田早希子・西川浩二・成瀬和子（2019）「イタドリ (*Fallopia japonica*) の表層施用がナス栽培に及ぼす影響」『有機農業研究』11(1): 32-37.
- 井上果子（2017）「山間地の伝統文化継承に見る新たな農村文化担い手の形：高千穂郷・椎葉山地域における神楽継承の事例研究」『農村計画学会誌』36: 375-382.
- 岩見麻子・馬場健司（2017）「岐阜県長良川流域の社会：気候変動をめぐるステークホルダーの関心事項の可視化の試み」『環境情報科学論文集』31: 29-34.
- 梶原宏之（2014）「類似制度との比較からみたジオパークと地理学の役割」『E-journal GEO』9(1): 61-72.
- 嘉瀬井恵子（2017）「地域らしさの再考：奥能登地域を事例として」『日本海域研究』48: 57-61.
- 北川愛二郎（2017）「インバウンドを見据えた農村振興の現状と課題—「農泊」で地域活性化へ—」『農村計画学会誌』36(2): 165-168.
- Koohafkan, Parviz and Miguel A. Altieri (2017) *Forgotten Agricultural Heritage: Reconnecting Food Systems and Sustainable Development*. Routledge.
- 香坂玲・内山愉太（2016）「世界農業遺産認定の効果と課題についての一考察—能登地域の事例より—」『農村計画学会誌』35(3): 361-364.
- 香坂玲・内山愉太・藤平祥孝（2016）「遺産に関わる国際認定制度は産地にメリットがあるのか—世界農業遺産の能登半島における伝統野菜・地名を冠する農産品の価格動向の分析を中心として」追手門学院大学ベンチャービジネス研究所編『人としくみの農業—地域をひとから人へ手渡す六次産業化—』pp. 1-24、追手門学院大学出版会。
- 黒川哲治・矢部光保・野村久子・高橋義文（2019）「認定地からの距離と生物多様性認証が贈答品の消費者評価に及ぼす影響—世界農業遺産・静岡の茶草場農法を事例に—」『農林業問題研究』55(2): 81-88.
- 町田怜子・北里美有・下嶋聖・金子忠一（2019）「阿蘇地域における自然と人との関わり・伝承を取り入れた熊本地震後の防災教育プログラム開発」『ランドスケープ研究』82(5): 521-526.
- 中山迅・真田純子（2018）「中山間地域の持続的発展を目指す「風景をつくるごはん」概念に基づく地域教育の構想—宮崎県西臼杵郡日之影町の場合—」『日本科学教育学会研究会研究報告』33(3): 103-108.
- 中里良一・諸岡弘文（2014）「更新事業における環境配慮計画の策定について」『農業農村工学会誌』82(3): 245-248.

- 野村久子・梶原宏之（2017）「阿蘇世界農業遺産の情報発信—フットパスと農文化を事例に一」横川洋・高橋佳孝編著『阿蘇地域における農耕景観と生態系サービス—文化的景観論で地域価値を再発見し世界文化遺産登録を支援する—』pp. 157-179、農林統計出版。
- 尾家建生・李美花（2018）「日本の「食の街道」と欧米の「フードトレイル」の比較研究」『観光研究』29(2): 75-81.
- 大元鈴子・中川千草（2017）「国際的環境保全制度の地域による使いこなし：綾ユネスコエコパークを事例に」『環境社会学研究』22: 100-111.
- 大津愛梨（2016）「熊本地震前後の阿蘇における「世界農業遺産」の意味—阿蘇が誇る民間の取組み—」『農村計画学会誌』35(3): 369-374.
- Orduna-Malea, E., J.M. Ayllón, A. Martín-Martín, and E.D. López-Cózar (2015) Methods for estimating the size of Google Scholar, *Scientometrics* 104: 931-949.
- 酒井暁子（2016）「ユネスコエコパークの評価と今後の運用に向けての提言—インターネット検索ヒット数を用いた制度間の比較分析から—」『日本生態学会誌』66(1): 165-172.
- 世界農業遺産 BOOK 編集制作委員会（2015）『次世代につなぐ美しい農の風景—世界農業遺産—』家の光協会。
- 島津芳枝（2015）「宇佐市民図書館の活動と地域活性化」『情報の科学と技術』65(5): 212-217.
- 武内和彦（2013）『世界農業遺産—注目される日本の里地里山—』祥伝社。
- 武内和彦（2016）「日本における世界農業遺産（GIAHS）の意義」『農村計画学会誌』35(3): 353-356.
- 寺村淳（2016）「世界農業遺産を活用したアクティブラーニング型授業に関する研究」『大分大学高等教育開発センター紀要』8: 61-70.
- 牛尾洋也（2016）「世界農業遺産調査：和歌山県『みなべ・田辺の梅システム』」『龍谷大学里山学研究センター2015年度年次報告書』176-185.
- 牛尾洋也（2017）「新潟県地域創生調査：国家戦略特区、世界農業遺産、日本遺産、環境政策」『龍谷大学里山学研究センター2016年度年次報告書』196-248.
- 山方貴順・中澤静男・大西浩明・祐岡武志（2018）「ブランド化に着目した世界農業遺産の単元開発—世界農業遺産「清流長良川の鮎」を事例として—」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』4: 103-111.
- 山方貴順・中澤静男・大西浩明・祐岡武志・河野晋也（2019）「「新しい豊かさ」に焦点を当てたESD授業開発—世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」の現地調査を通して—」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』5: 61-69.
- 山本耕平（2017）「Google Scholar/Books を用いた日本の社会科学文献の引用分析—格差社会論を事例として—」『京都社会学年報』25: 17-33.
- 楊燕（2017）「ジオパークとジオツーリズムに関する実践的研究：日中の事例を比較して」長崎大学博士論文。
- 祐岡武志・中澤静男・大西浩明・山方貴順（2016）「世界農業遺産のESD教材開発の視点—世界農業遺産「能登」と「阿蘇」を事例に一」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』2: 117-126.

#### 資料：検索・収集した119文献

##### 2つの研究目的の為の分析から除外した18文献

- 藤田渡（2018）「里山のポリティクス：エコロジカル・ナショナリズム研究序説」『甲南女子大学研究紀要』54: 29-45.
- 広瀬伸・内山五織（2014）「“うた”が紡うシマづくり」『農業農村工学会誌』82(9): 707-710, a1.
- 市壺吉孝（2014）「福井県における農業農村整備」『農業農村工学会誌』82(6): 475-478, a1.
- 石川英一（2014）「富山県の農業農村整備の展開方向」『農業農村工学会誌』82(6): 471-474, a1.
- 石川県輪島市役所企画課（2015）「“あい”の風がはぐくむ 快適・活気・夢のまち 輪島へようこそ」『日本風力エネルギー学会誌』39(3): 368-370.

- 徐錫元 (2016) 「除草の風土 [30] 静岡県中・西部の茶園およびその周辺部での雑草防除」『雑草研究』61(4): 157-158.
- 松尾勝則・佐藤太郎・本田純一 (2014) 「新潟らしい新技術調査検討の取組み」『農業農村工学会誌』82(6): 463-466, a1.
- 中村好男・高橋幸照・佐村公・遠藤和子 (2014) 「農業用水の多面的機能保全による農村文化の向上と地域振興」『農業農村工学会誌』82(9): 703-706, a1.
- 小関右介・西川潮 (2015) 「多面的機能に配慮した水田の自然再生に向けて」『日本生態学会誌』65: 299-301.
- 佐藤赳・小川茂男・合崎英男・高橋太郎・山田七絵・中嶋康博 (2018) 「山間地域の土地被覆分類における水田の誤判別補正手法の提案とその適用—中国雲南省紅河ハニ棚田を対象とした事例—」『日本リモートセンシング学会誌』38(1): 1-13.
- 佐藤義興 (2016) 「人と自然が共作する『阿蘇』」『野外教育研究』18(2): 1-8.
- 霜田博史・水谷利亮 (2018) 「住民による住民のためのビジネスの必要性—NPO「ほほえみの郷トイトイ」の活動から考える—」『高知論叢 (社会科学)』114: 81-107.
- 進藤裕英 (2012) 「機械から材料メゾメカニクス研究分野へ—高専から学んだもの—」『まてりあ』51(8): 367-368.
- 荘林幹太郎・岡島正明 (2014) 「むらづくりのための土地利用調整に関する新たな制度的枠組みの検討」『農業農村工学会誌』82(9): 715-719, a1.
- 田開寛太郎・デイビッド アレン (2018) 「持続可能な湿地づくりのための湿地教育に関する一考察—米国のWetlands Education を事例に—」『環境教育』28(2): 39-48.
- 山本俊光 (2018) 「幼少期に自然体験を頻繁に体験した若者の社会性」『環境教育』28(1): 2-11.
- 安中勇大・大石風人・安在弘樹・三輪雅史・熊谷元・広岡博之・家入誠二 (2015) 「阿蘇草原の火入れおよび放牧による植生量の変化に対する衛星画像解析」『システム農学』31(4): 117-125.
- 楊燕 (2014) 「ジオパーク制度の基礎的研究—その背景や類似制度の比較を中心に—」『동북아관광연구』10(3): 295-318.

#### 世界農業遺産の言及のみの71文献

- 荒川裕亮・志摩優介・柳井清治 (2018) 「能登半島里川におけるカワヤツメに関する地域文化とその漁獲量の推移」『石川県立大学研究紀要』1: 11-21.
- 張明軍・星野敏 (2019) 「訪日客の持続的受入における農家民宿群の役割と課題—石川県能登町「春蘭の里」を事例として—」『農林業問題研究』55(1): 54-62.
- 藤田直子 (2016) 「まちづくりの現場で、ランドスケープエコロジーはどのような貢献が期待されているか？」『景觀生態学』21(1): 43-47.
- 芳賀智宏・松井孝典・町村尚 (2016) 「将来シナリオ分析のための里山の景観の多様性のシミュレーションプロセスの開発—LANDIS-II と改良さとやま指数を用いて—」『土木学会論文集 G (環境)』72(6): II\_299-II\_309.
- 原田浩太郎・大慶則之 (2018) 「七尾湾の環境と漁業の現状と課題」『自動制御連合講演会講演論文集』61: 90-91.
- 萩川信弘 (2017) 「世界農業遺産 (GIAHS) に関する考察—『会津農書』と“Walden”の視点から—」『東北文化学園大学総合政策学部紀要』16(1): 85-115.
- 橋本禪・高力千紘・中村省吾・星野敏・清水夏樹 (2015) 「能登半島の社会生態生産ランドスケープ・ホットスポット評価」『ランドスケープ研究 (オンライン論文集)』8: 31-36.
- 林浩昭 (2016) 「原木乾しいたけを食すると地球温暖化防止に貢献できます」『理大科学フォーラム』33(10): 20-23.

- 林健一（2017）「地方自治体におけるラムサール条約義務等の実質化に関する基礎的検討—地域連携による湿地の保全・再生を目指して—」『中央学院大学社会システム研究所紀要』17(2): 9-28.
- 平野悠一郎（2019）「新たな森林利用の潮流と文化的価値の創生—森林をめぐる価値研究序論—」『林業経済研究』65(1): 27-38.
- 平澤毅（2014）「遺産と計画との間」『国立文化財機構奈良文化財研究所 平成 25 年度遺跡整備・景観合同研究集会報告書』118-129.
- 本田裕子（2015）「トキの野生復帰事業の展開に伴う住民意識の変容」『農村計画学会誌』34(Special Issue): 297-302.
- 五十嵐幸枝・小沢互（2015）「伝統食に対する志向性をもたらす産直施設における購買行動の差異分析」『フードシステム研究』22(3): 203-208.
- 石田文夫・遠州尋美（2018）「和歌山県への一極集中をもたらしたウメ産地形成過程と産地構造の諸特徴」『地域経済学研究』34: 86-103.
- 石垣広男・松本和貴・佛田利弘・濱田栄治・梅宗一郎・澤本和徳（2014）「石川県の農業農村整備における新たな取り組みについて」『農業農村工学会誌』82(6): 467-470, a1.
- 神山千穂・中澤菜穂子・齊藤修（2014）「自家生産及びいただきものによる市場を介さない食料供給サービスの定量的評価：全国及び能登半島を対象とした比較研究」『土木学会論文集 G（環境）』70(6): II\_361-II\_369.
- 神山千穂・橋本禪・香坂玲・齊藤修（2016）「社会生態学的生産ランドスケープにおける生態系サービス間のシナジーとトレードオフ解析：石川県下の基礎自治体を事例として」『土木学会論文集 G（環境）』72(6): II\_289-II\_297.
- 加納昌彦・納口るり子（2016）「静岡県の荒茶流通における茶幹旋業者の存立要件」『農業経営研究』54(2): 67-72.
- 加藤恵里（2015）「集落ぐるみの獣害対策の評価と今後の地域資源管理のあり方：社会関係資本の視点から」東京農工大学博士論文。
- 木部直美・藤田幸代・松嶋由佳・石原京子（2017）「阿蘇草原再生活動における草原環境学習の取り組み」『日本草地学会誌』62(4): 223-227.
- 霧村雅昭（2016）「施設園芸学分野における太陽光発電の可能性と課題」『地域生活学研究』7: 127-138.
- 黄愛珍・石橋太郎・狩野美知子・大脇史恵（2019）「九州における観光による地域活性化に関するヒアリング調査報告」『静岡大学経済研究』24(1): 25-42.
- 小路晋作・伊藤浩二・日鷹一雅・中村浩二（2015）「省力型農法としての「不耕起 V 溝直播農法」が水田の節足動物と植物の多様性に及ぼす影響（〈特集〉生物多様性に配慮した水田の自然再生）」『日本生態学会誌』65(3): 279-290.
- 香坂玲・戸越祥太・富吉満之・岩田まり・藤平祥孝・松岡光（2015）「大都市圏以外の地域における中小企業による森づくり活動の定量的把握—郵送アンケートによる石川県加賀と能登の地域比較より—」『林業経済研究』61(2): 13-22.
- 香坂玲・内山愉太（2016）「なぜ地域団体商標・地理的表示への申請をするのか 石川県能登地域における農産品の事例と林産品への示唆」『久留米大学ビジネス研究』1: 85-98.
- 楠本良延・稲垣栄洋・嶺田拓也・山本勝利（2017）「農村が育む植物の多様性と保全」『農村計画学会誌』35(4): 469-472.
- 桑原孝史（2017）「地域資源管理・環境保全のためのゾーニング」『村落社会研究ジャーナル』24(1): 60-61.
- 町田怜子・下嶋聖・粕川玉青・麻生恵（2014）「阿蘇地域におけるボランティアの草原再生に対する景観認識に関する研究」『ランドスケープ研究』77(5): 655-658.
- 牧野治敏（2018）「地域の素材を使ったアートとサイエンスを融合する総合的な学習カリキュラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』33(2): 27-30.

- 松田治 (2013) 「Satoumi (里海) は国際的にどのように捉えられているか？」『日本水産学会誌』 79(6): 1027-1029.
- 松本京子・岳野公人・浦田慎・松原道男・加藤隆弘・鈴木信雄・早川和一 (2017) 「地域に根ざした学校教育活動が子どもの定住志向に与える影響に関する研究—石川県能登町における海洋教育の事例から—」『環境教育』 27(1): 16-22.
- 松下重雄 (2014) 「地域外人材による文化的景観保全の取り組み—能登の里山里海景観を構成する間垣の保全支援活動を事例に一」『日本建築学会技術報告集』 20(44): 263-268.
- 嶺田拓也・吉迫宏・赤石大輔 (2013) 「過疎高齢化地域の老朽化・放棄ため池の新たな利活用創造に向けた取り組み」『農業農村工学会誌』 81(8): 635-638, a2.
- 村田一也 (2017) 「地域連携を通じた共同研究を基礎とする共同教育拠点の構築 2—能登町黒川地区での事例から—」『石川工業高等専門学校紀要』 49: 19-26.
- 中橋毅 (2017) 「地域医療が抱える問題」『日本老年医学会雑誌』 54(4): 491-498.
- 中島敦司・今西純一・入山義久・内田泰三・小野幸菜・橘隆一・田中淳・津田その子・中村華子・吉原敬嗣 (2019) 「地域植物資源の活用と保全の試み・阿蘇小規模崩壊地復元プロジェクト」『自然保護助成基金助成成果報告書』 28: 247-262.
- 中村華子 (2018) 「阿蘇小規模崩壊地復元プロジェクトの経緯と活動紹介」『日本緑化工学会誌』 43(3): 454-456.
- 七海絵里香・芝田忠典・大澤啓志 (2015) 「和歌山県みなべ町における観梅の成立過程」『ランドスケープ研究』 78(5): 443-448.
- 西川英治 (2016) 「サービス付き高齢者向け住宅の先端事例から見えてきた課題—「単体」から「街」へ—」『都市住宅学』 93: 58-63.
- 西川潮 (2015) 「佐渡世界農業遺産における生物共生農法への取り組み効果」『日本生態学会誌』 65(3): 269-277.
- 西村拓也・松川寿也・中出文平・樋口秀 (2016) 「景観法と連携した自然公園法の許可制度の運用実態に関する研究—自然公園特別地域での上乘せ基準に着目して—」『都市計画論文集』 51(3): 292-298.
- 西脇泰子 (2019) 「保護者の食意識からみた幼児に対する食育の考察」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』 51: 67-82.
- 尾家建生・李美花 (2018) 「日本の「食の街道」と欧米の「フードトレイル」の比較研究」『観光研究』 29(2): 75-81.
- 岡島賢治・西脇祥子 (2017) 「棚田・段畑法面構造の種別と表層地質の関連性」『農業農村工学会論文集』 304(85-1): I\_47-I\_54.
- 大澤啓志 (2015) 「伝統的地域資源の管理・利用に見る環境思想と農村計画」『農村計画学会誌』 34(3): 337-340.
- 大澤啓志 (2016) 「群馬県甘楽町那須集落の高生垣の特徴」『農村計画学会誌』 35 (Special Issue): 307-313.
- 大澤剛士・三橋弘宗 (2017) 「日本の農業生態系における機能別ゾーニングの試行」『応用生態工学』 19(2): 211-220.
- 齋藤彩乃・村田一也 (2018) 「柳田地区の集落構成に関する調査手法の構築—能登町黒川地区における集落形態に関する調査を通して—」『石川工業高等専門学校紀要』 50: 35-46.
- 佐々木宏樹 (2017) 「農山村における生物多様性保全と経済的連携」『日本生態学会誌』 67(2): 217-227.
- 佐藤赳・高橋太郎・合崎英男・山田七絵・中嶋康博 (2018) 「GPSトラックデータを利用した農道および農家の移動経路の判別手法と経路選択の評価」『農業農村工学会論文集』 86(1): I\_35-I\_45.
- 生態・環境緑化研究部会 (2018) 「阿蘇周辺自然公園の草原再生に関する種苗の使用範囲についての見解」『日本緑化工学会誌』 43(3): 459-463.
- 柴崎茂光 (2018) 「観光のグローバル化に対する地域資源管理のあり方」『森林科学』 82 : 21-24.
- 高橋強 (2012) 「里山保全と地域再生 (未来へつなぐ地域環境づくり、平成 23 年度石川県立大学公開講座)」『石川県立大学年報』 2011: 7-11.

- 武田美恵 (2019) 「水環境と新規ビジネスが棚田景観に与える影響に関する研究—徳島県勝浦郡上勝町の6集落を対象として—」『日本建築学会技術報告集』25(61): 1287-1292.
- 田中里奈・橋本禪・星野敏・清水夏樹 (2014) 「農村地域住民の幸福度に影響する地域的要因の質的調査による探査—石川県珠洲市における聞き取り調査をもとに—」『農村計画学会誌』33(Special Issue): 299-304.
- 丹野夕輝・山下雅幸・澤田均 (2016) 「静岡県中西部の茶草場における外来植物の分布と耕作履歴および環境条件との関係」『雑草研究』61(2): 61-70.
- 寺島佑樹・柳井清治・堀内美緒・栗野秀・岩井紀美子・中村浩二 (2016) 「能登半島里山地帯における河畔景観の変化が魚類相に与える影響」『景観生態学』20(2): 117-129.
- 豊田光世 (2017) 「人口減少の問題から考えるトキとの共生をめぐる合意形成の設計」『野生生物と社会』5(1): 29-40.
- 靄巻峰夫・久保朱里・山本祐吾・吉田登 (2016) 「過疎地域での生活排水と可燃ごみの連携処理による温室効果ガス削減について」『土木学会論文集 G (環境)』72(6): II\_23-II\_34.
- 靄巻峰夫・川崎聡太・中垣和登・山本祐吾・吉田登・吉田綾子・森田弘昭 (2017) 「過疎地域での生活排水・可燃ごみ連携処理の効率評価」『土木学会論文集 G (環境)』73(6): II\_189-II\_200.
- 上野裕介・増澤直・曾根直幸 (2017) 「生物多様性政策の新潮流:生物多様性地域戦略を活かした地域づくり」『日本生態学会誌』67(2): 229-237.
- 浦達雄 (2015) 「奥能登・春蘭の里における農村の活性化」『大阪観光大学紀要』15: 1-7.
- 宇都宮大輔・野村進也・日鷹一雅 (2017) 「農村の昆虫の生物多様性を多様な主体の連携で守る取組み—奥能登、石川県珠洲市における挑戦—」『農村計画学会誌』35(4): 488-491.
- 矢口芳生 (2015) 「成熟社会にふさわしい農政改革と農村創生のために」『土地と農業』45: 4-44.
- 山下良平 (2013) 「里山環境の派生的価値の経済評価に基づく地域活性化計画の診断」『農村計画学会誌』32(Special Issue): 185-190.
- 山下良平 (2013) 「生物多様性保全活動に対する企業の参加・定着条件と展開方向に関する研究」『環境情報科学 学術研究論文集』27: 271-276.
- 山下良平 (2014) 「ボーダレス化する農村体験需要は都市農村交流を活気づけるか?」『農業農村工学会誌』82(9): 711-714, a1.
- 山下良平 (2014) 「石川県による企業との協働意向調査にみる農山村側のニーズの分布と特徴」『環境情報科学 学術研究論文集』28: 407-412.
- 山下良平・一ノ瀬友博 (2011) 「地域発展過程の合意形成の特性に着目した過疎地型地域経営モデルに関する事例的研究—石川県能登町「春蘭の里」の取組みから—」『農村計画学会誌』30(3): 436-442.
- 吉田謙太郎 (2019) 「2020年東京オリンピック・パラリンピックにおける調達コードと環境認証」『環境経済・政策研究』12(1): 59-63.
- 関司直也 (2017) 「現代日本の農山村における資源管理の担い手問題—過少利用下での世代交代を視野に入れて—」『歴史と経済』59(3): 20-26.

#### 世界農業遺産が二次的な研究対象の14文献

いずれも「引用文献」リストに掲げられているので、ここでは著者名(刊行年)のみを記す。

- 服部浩司・岳野公人・湯地敏史 (2017)
- 池邊このみ (2014)
- 稲垣栄洋・長谷川佳菜・窪田早希子・西川浩二・成瀬和子 (2019)
- 岩見麻子・馬場健司 (2017)
- 梶原宏之 (2014)
- 嘉瀬井恵子 (2017)

北川愛二郎（2017）  
町田怜子・北里美有・下嶋聖・金子忠一（2019）  
中山迅・真田純子（2018）  
中里良一・諸岡弘文（2014）  
大元鈴子・中川千草（2017）  
酒井暁子（2016）  
島津芳枝（2015）  
楊燕（2017）

**世界農業遺産が一次的な研究対象の16文献**

いずれも「引用文献」リストに掲げられているので、ここでは著者名（刊行年）のみを記す。

荒木祐二・岡村浩美・塚脇真二（2015）  
濱本和孝（2016）  
原祐二・三瓶由紀（2016）  
林浩昭（2016）  
稲垣栄洋・楠本良延（2016）  
井上果子（2017）  
香坂玲・内山愉太（2016）  
黒川哲治・矢部光保・野村久子・高橋義文（2019）  
大津愛梨（2016）  
武内和彦（2016）  
寺村淳（2016）  
牛尾洋也（2016）  
牛尾洋也（2017）  
山方貴順・中澤静男・大西浩明・祐岡武志（2018）  
山方貴順・中澤静男・大西浩明・祐岡武志・河野晋也（2019）  
祐岡武志・中澤静男・大西浩明・山方貴順（2016）